

# 法華コモンズ通信

法華コモンズ仏教学林事務局

192-0051 東京都八王子市元本郷町 1-1-9 善龍寺内 FAX 番号 ⇒ 042-627-7227  
ブログ <https://hokke-commons.jp> /メールアドレス [hokkecommons@gmail.com](mailto:hokkecommons@gmail.com)

## 巻頭言

### 十年目という節目を迎えて

法華コモンズ仏教学林 事務局 竹内 敬雅

法華コモンズ仏教学林もついに十年目のスタートを切ることが出来ました。これもひとえに日頃よりご受講頂いている皆様、またご賛助やお声がけなどご協力を頂いている皆様のお陰と感謝申し上げます。西山茂理理事長を中心とし、これからもスタッフ一同で、開かれた学びの場として法華コモンズⅡ共有地を守っていききたい所存です。

私がコモンズとご縁を持つことになったのは、布施学林長に誘われて当時東洋大学で開催されていた本化ネットワーク研究会に参加したことからです。その頃は教学に関する勉強会と、宗教学に関する実践面での勉強会とほぼ交互に行われていたように記憶しております。その後継となる法華コモンズでも論拠に基づく講義によって、フラットな立場で天台・日蓮教学関係者のみならず、全ての宗教への学びを求める人のための場となるような教学的な講義が多くなりながらも、近現代での宗教の価値や、宗教学の側面からの救済に関する講義もすっかりと行われてきました。

平成二十八年度前期の「現代における仏教倫理の可能性」、平成二十八年度後期の「近代仏教研究の最前線」、平成三十一年度後期の「これからの天皇制」、令和四年度後期の「震災転移論―末法の世に菩薩が来りて衆生を救う?」、令和五年度後期の「史実・尼僧蓄髮縁付―ブツダから現代まで」、令和六年度前期の「臨終行儀の今」などの多数の講義に加え、書籍としてご講義頂いた先生方共著による『これからの天皇制・令和からその先へ』が発刊された折には記念シンポジウムも開催されました。そして令和六年度後期、新型コロナ禍の影響により令和二年度前期に企画されたながら延期となっていた連続講義「現代の法華菩薩道とは何か」を開催する事が出来たのは大きな喜びです。

本化ネットワーク研究会時代には講義終了後も茶話会のような形で先生や参加者の間で多くの論議がなされ、その伝統は法華コモンズでも続いていたのですが、新型コロナ禍以後はオンラインや動画配信での受講者が増えた事などもあり、少し規模が小さくなってしまった事は残念にも感じています。しかし、遠方やお仕事などで時間の合わない方など、より多くの方に法華コモンズの素晴らしい先生方による講義をお届けする事が出来るようになったという嬉しい側面もあります。

十年から十五年、二十年とこれからも法華コモンズ仏教学林が続いていくよう、皆様のご協力ご支援をどうぞよろしくお願いいたします。



現代の法華菩薩道とは何か

【第一回 中野毅先生】

2016年の法華コモンズ仏教学林発足当時より、西山茂理事長より提案されてきた「四菩薩プロジェクト」が本年度、遂に実施されることとなり、その筆頭となる「上行プロジェクト」、すなわち「政治と宗教」をテーマとする講座が開催された。この難しいテーマを引き受けてくださったのが創価大学名誉教授の中野毅先生である。日蓮聖人を論じるにあたり避けて通れないのが「立正安国」であり、「立正」を何と定義するかにより、日蓮門下同士においても激しく意見が戦わされてきた。特に議論の的となるのが創価学会を支持母体とする公明党の政治参加、特に政権与党であることが政教分離の原則に反するのではないかとの批判が絶えないが、中野先生はまず、宗教と政治の関係は様々あるが、政教分離の原則を採用している国家においても「政」とは「政治」ではなく「国家」政府」のことであり、宗教団体は政教を持つことや特定の政党を支持することはこの原則に反しないことを丁寧に説明された。

続いて創価学会の政治参加による公明政治連盟創設から言論問題を経て、公明党が宗教政党から国民政党へ転換したこと、そして現在の自公連立政権に至るまで詳しく解説され、政治参加により創価学会・公明党が得たもの失ったものにまで鋭く踏み込まれた。特筆すべきは、公明党と共産党の支持基盤が競合すると世間一般で論じられてきたが、実は公明党支持層の方が世帯収入的には共産党支持層よりも低い層が多いという統計資料を提示され、これまでの常識に一石を投げられたことは特筆すべきことと思

われる。

さらに今回の講座は、同じく日蓮系教団として政治参加してきた割にはその実態が語られることの少なかった立正佼成会の活動についても時間を割かれ、刮目すべき内容であった。まず立正佼成会の宗教活動そのものがあまり知られておらず、歴史的な流れを解説された。そして現在の信者数の減少が、親から子への信仰の継承を必ずしも推奨しないためなどの解説をいただいた。また立正佼成会の特徴として、早い段階からの宗教対話による他教団・他宗教との連携や交流に動き出しており、新日本宗教団体連合会（新宗連）、世界宗教者平和会議（WCRP）に創立メンバーとして国際的な活動に取り組んでいた状況をお話いただいた。

そして国内では互いに対立する宗教団体として見られてきた一方、国際的な舞台では互いに席を並べるシーンもあるなど、かつての関係性だけでは語れない状況が起きていることの一因として、創価学会の教義の変更を挙げて解説された。

非常に示唆に富む講義であったが、受講者より、創価学会の教義変更が過去の整合性が取れていないのではないか、また信者として公明党の政策に反対することと創価学会の信仰活動の両立が困難な場面もあるなどの厳しい質疑や感想が出されて、中野先生としては創価学会の代表者として代弁している訳ではないため、返答に困られるシーンもあった。



中野 毅 先生

しかし、政治の話題が関わる「上行プロジェクト」としては避けることが困難な内容であり、このような難しいテーマを快く引き受け、深い洞察を示していただいた中野先生の寛容な態度に、あらためて敬意の念を抱いた充実した講義となった。（林明彦 記）

【第二回 原井日鳳先生】

四菩薩プロジェクト企画「現代の法華菩薩道とは何か」第2回 浄行プロジェクト「環境活動部門」として、令和六年十一月二十五日「今日、危機の時代における仏教の思想試論―共生論より蘇生論へ」と題して、法華宗本門流 原井日鳳先生より御講義をいただいた。講義の冒頭では、法華コモンズ理事長の西山茂先生から御講師へのご謝辞、そして講義開始に先立ち、学林長布施義高先生より丁寧なるご挨拶を頂き、また、司会進行役のスタッフからは、原井日鳳先生の略歴が披露された。続く本講義では、原井日鳳先生による貴重な御講義を賜り、一時休憩を挟んだ後、参加者より講師への質疑応答が行われ、活発な意見が交わされた。以下は、御講義当日の内容から、主だった部分の概要の一部を述べたい。

はじめに、現在社会が抱える「危機における時代」、それは現代人が直面している末法時代における「菩薩行の実践」とは、具体的に言えば何か、という問いが設けられた。そして、菩薩行を具体的に実践していくポイントとして、「共生論」から「蘇生論」という概念が必要になるのではないかと、言うことを提起され、その実践活動には、「信心・奉仕・布施」の三点が挙げられた。すなわちそれは、日蓮聖人が推奨されている『立正安国』の思想は、今日に置き換えるならば、「環境安国論」という言葉として譬えられる。

本講義の骨子となるものには、一に「宗教と科学」、二に「仏法と世法」、三に「価値論」、四に「認識論」という四つの柱から構成されており、この四つの概念をそれぞれに対比し、それらを実践的菩薩行に約すれば、自行化他に亘る「信心行」であることから、自らが妙法五字を唱え、他者に妙法五字を受持させて、お題目を唱えることを勧める意味に通じている。また、「報恩行」の実践こそが、「環境安国実現の要素」であり、必要不可欠な修行であることを述べられている。つまり、娑婆世界を「仏国土」として清浄化するということは、衆生世間に居住する我々人類が行なう、国土世間である自然環境への「報恩行の実践」が肝要となるのである。つまりそれは、お題目を唱える人々が、一人でも多く輩出されることで、依正不二の法門によって、「娑婆即浄土」世界の実現プログラムが、本講義における「浄行プロジェクト」の骨子となっている。

しかし、昨今の自然と社会では、自然環境並びに都市環境を整備するといった大義名分を掲げながらも、利益の追求に終始して、過剰なまでの自然破壊や、限られた資源を、貪り尽くすことによって地球環境が枯渇している現状が窺える。このような行為が、現在も継続していることにより、地球温暖化等、様々な弊害が浮き彫りとなって顕れている。また、隣国における戦争にしても、人間同士の価値観や、立場の異なりによる対立から端を発しているが、およそ、それらの要因にあるものには、「人心の乱れ」が挙げられよう。

こうした様々な問題に対して、本講義では、「法華本門の菩薩(浄行)」の体現化の必要性を示しつつ、これまでの様な、仏教各派が汎神論的仏身論を立て、法身如来の実相を説くのみでは、真の解決には至らないであろう」と述べられた。また、「法華本門の

菩薩行」ということは、本仏より委嘱された菩薩の使命であり、浄仏国土・衆生成仏であるから、「菩薩行」を説く浄土教と、法華経による思想の対比を試みる」という必要性があった。そして「特に現代では浄土教からの派生の共生論は、今や広く世に唱えられている。しかし、今日の命と環境の危機には、撰受的共生論では間に合わず、命の原点に立ち帰る、法華経の蘇生論、つまり「法華本門の菩薩道」による「心の蘇生」が必要」であることを述べられた。

また、原井先生は冒頭より、『唱法華題目抄』の一説にあたる「妙とは蘇生の義なり」という言葉をもって、「今や環境(危機)の蘇生を実証する思想哲学を打ち立てるべき時」と考え、人類の滅亡を回避するビジョンは、「蘇生(である)」とすべき論拠を表明したい」と述べられた。すなわちそれこそが、浄行プロジェクト実践の一つである「心の蘇生論」の展開であり、それらの実現のためには、仏教と諸宗浄土教との比較、さらには自然科学と社会科学を検証対比して、法華本門による依正不二の原理を帯した「法華本門思想に基づく蘇生論」を以て、人類の破壊防止(防止非悪)と、末法に於ける三世の仏国土環境立正安国(実現のためのビジョン)と、その実践方法を示された。

今回の「四菩薩プロジェクト企画」の御講義は、



原井 日鳳 先生

予てより原井日鳳先生他、諸先生方に講義依頼をお願いしていたが、コロナ感染拡大による自粛期間を経て、本日ようやく、実現の機会を得ることが出来た。原井日鳳先生におかれては、大変お忙しい中であつたにもかかわらず、のべ三時間に亘る、大変崇高なる御講義を賜ることが出来たことを、スタッフ一同、心より謝意を表したい。(山名隆年 記)

### 【第三回 弓削多一朗先生】

2024年12月21日(土)に「現代の法華菩薩道とは何か」の第3回「法音寺福祉の法華的基礎」救ライから総合福祉へ」が弓削多一朗先生により行われました。

法音寺の始祖・杉山辰子は、明治16年に無辺行菩薩の自覚で活動していたという鈴木キセと出会い、唱題行と他者のための行動を勧められ、旅人に食事の世話などをするなか医学による薬餌療法と法華経の教えによる精神療法を組み合わせることを考えます。杉山辰子は「妙法で治らない病はない」と説得した医師の村上斎とともに名古屋で「佛教感化救済會」を名乗り総合的な福祉活動を進めていきました。

あるとき経営不振に陥っていた東京の巣鴨にあるハンセン病の病院を見学したところ、患者たちが治療らしい治療もされずに悲惨な状況であったのを見て、杉山辰子はそのまま病院で介護活動を行います。

患者たちは自分の治療費も満足に払えないため、必要な資金は名古屋の支持者たちから送ってもらったものの、半年もすると徐々に届かなくなり、名古屋から資金がもう出せないとの連絡もあり、名古屋に戻ることにしました。

その後も何かハンセン病患者たちのために何かできることがあると、各地で慰問を行っていきます。

慰問では「ここは普通の人が来るところではない」と言われながらも薬品の配布や法華経・唱題の大切さを説いていきました。

当時の杉山辰子はいくつかの予見的中させ、そのことで自身の活動における使命感を高めていったようです。関東大震災の際には支持者たちと共に名古屋での被災民の救済活動や、東京への物資の支援を行いつつ『世界の鏡』という法華経の解説および日蓮の一代記が書かれた書籍を街頭で配布すること、自分達の考えを世に広めようとした。このことがきっかけで後に法音寺を開山した鈴木修一郎（鈴木修学）も活動に参加します。

鈴木修一郎は福岡にあるハンセン病患者の病院で支援活動を行い、資金不足に苦しみながらも各地の寺院に窮状を訴えて後援会を作り、2年間支援を続けたあとで名古屋に戻ってきました。

そのときに救済活動というものは収入の裏付けが必要であること、多くの人たちの力を借りなければならぬこと、真心を込めて訴えることで人々が協力してくれるという思いが必要であることを学んだそうです。

昭和11〜14年には孤児院や保育園、診療所などを運営するようになります。また当時は戦争の足音が近づき、宗教活動にも差し支えるようになったため、表向きは人格形成のための講演会であるという形をとるようになりました。

戦争が激化するなかで特別高等警察の厳しい取り調べを受け、組織名の変更や支部解散、宗教活動の禁止などの厳しい処分を受けることとなります。このときに「昭徳会」を名乗るようになります。

昭和24年には知的障がい児施設の運営を継承、この経験から福祉は同情では限界があり、知識や経験のある人間が現場に立つ必要性を痛感します。そ

のためには教育機関が必要と考え、昭和28年には学校法人法音寺学園（現日本福祉大学）が開学します。

終戦後に行き場のない多く孤児の受け入れや運営が行き詰まった養育院事業の継承を行い、鈴木修一郎が鈴木修学として日蓮宗で得度、最終的に昭和25年に日蓮宗大乗山法音寺となりました。宗教活動の再開とともに全国に布教拠点を設置、各地で講話会や仏教まんがの出版を行います。

かつて杉山辰子は「仏になるにはそれだけの働きが必要で、一番よいのは親のない子供を育てること」と言ったそうですが、法音寺は最初はハンセン病患者の支援や孤児の受け入れなどから、困難にあつてはいる人々への福祉を持続的に実践するための模索を現在に至るまで続けていること、また一宗教団体として活動を続けていたなかで日蓮宗に合流したことについて、おそらくは特別高等警察の追求や尋問を受けた経験から福祉活動を円滑に進めるための決断であったであろうこと、そういう視点で活動を行っている宗教組織は他にどれだけあるのだろうかと考えさせられました。

自分にとって福祉や利他行とは何なのかを考えなおすきっかけともなり、法音寺に一度訪問してみたいと思わせる内容でした。貴重な講義をありがとうございました。（武川清明 記）



弓削多 一朗 先生

## 講義報告

## 連続講座

## 後期全四回

### 「仏教哲学再考②」

### ―「大乘起信論を手掛かりにIII」―

講師 末木 文美士 先生

報告 佐古 弘純

末木文美士先生による講座「仏教哲学再考②」―大乘起信論―を手掛かりにIII―が開催された。本講座は、全十六回を予定している。前回までは『大乘起信論』（以下『起信論』）を中心としていたが、九回目からは、『起信論』の注釈書として龍樹が書いたとされる『釈摩訶衍論』（以下『釈論』）を主題におき、最先端の研究を踏まえ、講義が行われた。

九回目の講義は、『釈論』の概要を確認する内容であった。はじめに、『起信論』の展開の諸相を再確認し、『釈論』の先行研究を提示された。その中で『釈論』の成立問題に関する資料、関悠倫『釈摩訶衍論』の成立と武則天（東洋学研究五八、二〇二一）を取り上げ、その主張に対する自身の見解を述べられた。

次に中国における『釈論』として、『釈論』成立当時の東アジア仏教圏において独自に展開した契丹の仏教に焦点をあてた。宋が儒教中心に宋学（朱子学）を生みながら、仏教の主流が臨済系の禅によって占められていく中で、契丹は唐の時代の融合的、総合的な仏教の立場を継承し、顕（華嚴）・密・禅の併修を主流として、『釈論』を重視する、といった特徴があることを示された（『禅の中世』、臨川書店、二〇二二、一〇六頁参照）。

そして、早川道雄『釈摩訶衍論の新研究』（ノンブル社、二〇一九）を参考にして、『釈論』の中心思想である「不二摩訶衍法」と「三十二法門」について解説した。『釈論』は、『起信論』に基づきつつも、

一心・二門・三大を同等視していること、「不二摩訶衍法」は三十二門を完全に超える果分不可説として隔絶していること、具体的な実践として様々な呪(特殊文字)が使われていること、といった新説を大胆に展開している部分を確認した。最後に、果宝(一三〇六―六二)の『宝冊鈔 八』(T七七・八二―a―八二二a)で示される、『釈論』の真偽について論じている箇所を説明し、講義終了となった。

十回目の講義は、『釈論』の根本思想についての内容であった。はじめに、先生は「本覚という概念は『起信論』に見られる。しかし、それがストレートに影響しているわけではない。本覚思想につながる日本仏教の流れの一つを『釈論』の系譜として見ることができないのではないか」と自身の見解を述べられた。次に、『釈論』の根本思想となる「三十三種法門」(全法門を三十三種に分類)について、三十二の法門は門(因、主体)と法(果、真理)がはっきり区別されていることに加え、その全てを含む「不二摩訶衍法」のみが門なき法(到達する手段がない)として位置づけられていることなどの特徴を解説された。

さらに「三十三種法門」の前重八門・前重八法では、『起信論』で説かれる「真如」と「生滅」という語を、相対的(対立)な見方であるとして使用しておらず、自他一体(対等)とする見方を使用していることを説明された。最後に、早川道雄『釈摩訶衍論の新研究』を参考に、方便門構図(『釈論』の見方)と凡聖構図(『起信論』の見方)の重層性について述べ、さらに井筒俊彦『意識と本質』(岩波書店、二〇〇七)に記される「表層意識から意識のゼロポイント」(二一四頁)の図と、円爾の『逸題無住聞書』(『中世禅籍叢刊』五)にある「今経重々大意図」(四七八頁)を比較して、その相似性について解説され、講義終了となった。

十一回目の講義は、『釈論』の真如論を主題とした内容であった。はじめに、齋藤嘉文『跳訳 道元』(ぶねうま舎、二〇一七)を参考に「世界(応身)・世界の外部(報身)・世界海(法身)」の関係図と、『法華経』見宝塔品の二仏並座の思想(生者・死者・生死一体)を比較し、大乘仏教の基本的な世界観を説明された。

次に、『釈論』の中心となる真如論について解説された。先生は、『起信論』が真如と生滅を二元的に捉えているのに対し、『釈論』はそれらをトータルな形(対等)で捉えようとしており、真如そのものに働きがあるとするのが特徴」と述べられた。その具体例として、「二種本法各有十名」を説明し、到達される法(所入)としての一体摩訶衍(一なるもの・純化)と三自摩訶衍(多様なもの・純化されていない)は対等な関係にあることを示された。

一方、法への入口(能入)では、心真如門と心生滅門は一体化できないもの(二門名字差別)として区別され、真如門は「一向雜乱住位」(様々な要素があり段階づけられない)カオスの、生滅門は「向上門、向下門」(流動的なものとして段階づけられる)整序的)とする『釈論』の見解(「同異分相門」)を説明された。最後に、『釈論』は「真如門と生滅門」(能入)と「一体摩訶衍と三自摩訶衍」(所入)の関係について説かれていることを強調して、講義終了となった。

十二回目講義は、『釈論』の識論と真如・無明論を主題とした内容であった。はじめに、『釈論』の重要なポイントについて、『起信論』の如来蔵縁起は東アジア仏教の基礎とされているが、『釈論』は真如を中心とする真如論である。無明の位置づけが曖昧な『起信論』に対し、『釈論』では無明の問題を取り上げている」と指摘された。続いて、『起信論』から法蔵(随縁・不変真如)へ、そこから澄観(華嚴)・

湛然(天台)・『釈論』への展開を示して、日本の仏教哲学はインド仏教の空思想(否定)を根本としているのではなく、真如説(肯定)に基づいていることを解説された。

次に、『釈論』の識論は従来の八識・九識説を十識説へと昇華させていることを確認して、心を分析する個の識(八識・普遍・理性的)から、個を超えた心の奥底にある一なるもの(真如・通底・身体的)との関わり方へと転換していることを説明された。最後に、『釈論』は真如も無明も「一心本法」を根拠に持つ対等なものとしており、真如(本覚)と無明は一体性(同体同相義)と個別性(異体異相義)の両方の様相(月の譬喩・闇の譬喩)を持つことを解説され、講義終了となった。

本講座は引き続き四月に再開される予定です。次回からは空海、安然といった日本仏教に焦点をあてた講義となるため、末木先生の最先端な知識を拝聴できる貴重な機会になることは確実です。先生は聴講者に対し、分かりやすく解説して下さい。新規聴講も問題ありません。皆様の申し込みをお待ちしております。なお、本講座はリモート開催となっており、講義動画も受講者に配信し、期間内であれば何度でも見ることが可能です。詳細につきましては、『法華コモンズ』ホームページからご確認ください。



末木 文美士 先生

## 『法華経』『法華文句』講義

講師 菅野 博史 先生

報告 澁澤 光紀

菅野博史先生の連続講座『法華経』『法華文句』講義は、この一月で通算八〇回を数えましたが、

ここでは本年度後期の一〇月から一二月までの講義（通算七七回〜七九回）を報告します。

講義の範囲は、『法華文句（Ⅲ）』のテキストでは、七二二頁一四行目の「譬えを五となす。一に「捨父逃逝」より下は、父子喪失喻と名づく」から、七三八頁の四行目「第一義空、四無所畏を、床と為すなり」まで。経文では、「譬えば人あって、年既に幼稚にして、父を捨てて逃逝し」から、「遙かにその父を見れば、師子の牀に踞して」までです。

十月の講義は、菅野先生の著書『法華経の出現』の第六章「長者窮子の譬喩（家出息子の物語）」と中国の教判思想」の説明から始まりました。この第六章は、第一項が長者窮子の物語の現代語訳、第二項がその教学的解説です。特に第二項「中国の教判思想に対する影響」では、中国において『法華経』が教判思想の基準を与える經典として評価され、特に「長者窮子の譬喩」は父が窮子を教導していくプロセスが説かれているため、釈尊が声聞を「方便の三乗から真実の一乗へ」と導いた教化法の譬喩とされたこと、また竺道生、法雲、吉蔵、智顛の解釈を採り上げて、智顛の五時教判が整えられていった次第が述べられています。この解説により、長者窮子の譬喩がいかに教学的に深みのある物語であったのか、

実に良く理解することが出来ました。

またテキストの随文釈義（経文の解釈）では、長者窮子の譬喩を、父子相失の譬え、父子相見の譬え、追誘の譬え、委知家業の譬え、付家業の譬えの五つに分けて、それぞれの譬えを解説。そして、経文の「年、既に幼稚にして」と「年、既に長大にして」を対比して、幼稚は無明が厚く重く理解する心がないこと、長大は善根が増えて次第に現れようとすることを表す、と解釈したところで講義終了となりました。

一二月の講義は、窮子が父を捨てて他国に遍歴した後、偶然に本国の父の屋敷に行きつくと、その屋敷は大いに富んで、財宝も人々も動物も溢れていたというところまで、その教義の意味を詳しく解釈していきます。その中でも、特に興味深いのは、「象・馬・車乗・牛・羊は無数なり」という一節の解釈です。科文では「象馬牛羊無数を釈す」と題していますが、『文句』ではこの動物達を、悟りへの観法にあてて解釈します。

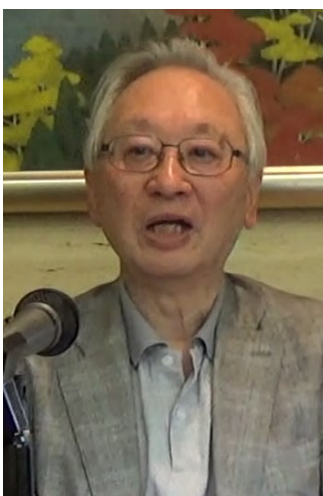
一、一心三観は「象」で、円教の大乗を運ぶ。  
二、次第三観は「馬」で、別教の大乗を運ぶ。  
三、即空・析空の観は「牛」で、通教などの大乗を運ぶ。  
四、析法観（蔵教）の自行は「鹿羊等」で、二乗の法を運ぶ。

そして「無数」とは、権実の諸法を「車乗」と名づけ、権実の智による観を「象馬牛羊」と名づける」と解釈します。またこうした無数の教法だけではなく、観智（観察する主体としての智慧）も同様に無数である、としています。何気ない言葉から深い教義内容を引き出す、目から鱗の『法華文句』の随文釈義の面白さを、今回も体験できました。

一二月の講義では、父を捨てた窮子が、遍歴の最中に偶然に父の屋敷にたどり着き、人も物も溢れた豪華な屋敷のなかで、跡継ぎの子供の行方を思い煩う父が、威徳ある姿で椅子に座っているのを、門から眺め見るところまでを、随文釈義していきました。経文の解釈では最初の「他国」を常寂光土を除いた三土（凡聖同居土・方便有余土・実報障礙土）であるとし、「商估」とは菩薩のことで、その三土で菩薩たちは『法の利益』を求めて商売（修行）するという、実に絶妙な喩えをしています。

とはいえ長者（仏）が跡継ぎの窮子（弟子）を教化することを、「大乘の家業は、互いに次々に付与する」と述べて、「法の弘教（下種）」を「商売」と重ねて解釈するのは、いかがなものか、それは仏の「無縁の大慈悲」と矛盾するのではと思ったのですが、その後に経文の「窮子、備賃展転して、たまたま父の舎に到りぬ」の「父舎」を釈して、「父」は道後（悟った後）の法身、「舎」は対象に制約されない「絶対平等の仏の慈悲（無縁慈悲）」を譬える」とあり、すぐにつまらぬ疑義は氷解しました（笑）。

次回の後期第五回（通算八一回）の講義は、二月一七日に開講です。ぜひ受講お申し込みいただき、『法華文句』の随文釈義の面白さを満喫して下さい。



菅野 博史 先生

# 法華コモンズ仏教学林 前期講座一覧

2025(令和7)年度 前期講座 開講:4月~9月

●すでに終了した講義も、動画配信等で受講できますのでお申込み下さい●

## ●仏教哲学再考② 『大乘起信論』を手掛かりにⅣ 全4回【オンライン講座】

開講時間：水曜日 午後6時30分~8時30分

講師：末木文美士

開催日：第1回(通算13講) 4月9日

第3回(通算15講) 6月11日

第2回(通算14講) 5月7日

第4回(通算16講) 7月2日

【受講料】1期4回分8,000円、1回3,000円

## ●歴史から考える日本仏教⑫ 「中世社会と寺社の諸相」 全4回【対面&実況】※4講のみ対面・実況

開催日時：火曜日 午後6時30分~8時30分

講師：菊地 大樹

第1講 4月15日 中世寺社の成立—権門寺社と荘園制—

第2講 5月20日 中世寺社の本末関係—白山・延暦寺の強訴から—

第3講 6月17日 僧侶・神官のライフサイクルと身分

第4講 7月22日 寺社聖教の発展と流布

【受講料】1期4回分8,000円、1回3,000円

## ●シリーズ講座 《法華仏教講座》 全6回【対面&実況】

開催日時：土曜日 午後3時30分~5時30分

第1回 4月19日 「日蓮における五義判の形成と展開」

講師：花野充道

第2回 5月10日 「写本で伝来した日蓮の御書における真偽と系年」

講師：川崎弘志

第3回 6月28日 「安然の円密一致思想の特徴」

講師：土倉 宏

第4回 7月5日 「千葉一族の信仰と富木常忍の周辺」

講師：坂井法暉

第5回 8月2日 「近世過去帳の世界—西山本門寺18世日順『内過去帳』を中心として—」

講師：本間俊文

第6回 9月27日 「「五時八教は天台教判に非ず」の再検討」

講師：花野充道

【受講料】1期6回分12,000円、1回3,000円

## ●連続講座 「『法華経』『法華文句』講義」全6回【対面&実況】 講師：菅野 博史

開講時間：月曜日 午後6時30分~8時30分

【受講料】1期6回分12,000円、1回3,000円

開催日：第1回 4月28日 / 第2回 5月26日 / 第3回 6月30日

第4回 7月28日 / 第5回 8月25日 / 第6回 9月29日

【会場】新宿常円寺 祖師堂地階ホール 新宿区西新宿7-12-5 電話03-3371-1797(寺務所)

【申込】受講講座名・氏名・住所・連絡先を明記して送付 ⇒ FAX: 042-627-7227

mail: hokkecommons@gmail.com / ブログ: <https://hokke-commons.jp/>

192-0051 八王子市元本郷町1-1-9 善龍寺内 法華コモンズ仏教学林 事務局

# 賛助会員一覧 (敬称略)

※令和六年度分として

## 個人会員 ※1口 一万円

6口	小松 正学	1口	間宮 啓壬
6口	松原 勝英	1口	鈴木 正厳
6口	中野 颯昭	1口	長谷川正浩
3口	村上 東俊	1口	互井 観章
3口	鍋島 真永	1口	濫澤 光紀
2口	菅野 博史	1口	国府田義昭
1口	西山 茂	1口	成田 喜達
1口	菊地 大樹	1口	久保田正尚
1口	持田 貫信	1口	匿名 希望

## 法人会員 ※1口 五万円

2口	立行寺	2口	本妙寺
2口	東洋哲学研究所	2口	大久寺
2口	持法寺	1口	法妙寺
2口	本國寺	1口	天龍寺
2口	善龍寺	1口	善生寺

## 特別支援団体

本多日生記念財団 36万円

※本多日生記念財団様からは、本学林の前身となる本化ネットワーク研究会の時代から、毎年継続して多額のご支援を頂いております。

◎皆さまの「ご賛助」「ご支援」に篤く感謝申し上げます。

法華コモンズ仏教学林では、本学林の趣旨に賛同して運営の維持に協力して頂ける「年間会員」を新学期時に募集しています。左記の要領にて、受付けておりますのでぜひご協力のほどお願いいたします。

## 【年間賛助会員 加入申込み】

- 個人会員 1年間1口(1万円)
- 法人・団体会員 1年間1口(5万円)

## 《お申込み年度の特典》として

- 1、個人会員で6口以上の方には、会員のみ使える年間フリーパス受講証を差し上げます
- 2、法人・団体会員では2口で、誰でも使える年間フリーパス受講証を差し上げます

※「年間フリーパス受講証」は、開設の全ての講座を一年間にわたりの受講することができます。

- お申込み頂ける方は、次の内容を書いて、表紙タイトルまた11頁下にあるメールアドレス、アクセス、ブログからお申し込み下さい。
- ★ 個人か法人か、また何口かを明記する。
- ★ 名前、年齢、住所、電話、アクセスまたメールアドレスを明記する。

● 直接にご加入・ご支援を頂ける方は、郵便振込用紙にて通信欄に口数をご明記の上、同封の振込用紙か、左記の口座にてお振込み下さい。

【口座名】 法華コモンズ仏教学林

【口座番号】 0015007634712

# 「講座映像版」販売のお知らせ

○ 菊地大樹先生「吾妻鏡」と鎌倉仏教」6回

○ 池上要靖先生「初期仏教研究」6回

○ 菊地大樹先生「歴史から考える日本仏教」

① 鎌倉時代を射程にいれて ② 《顕密問題》を考える

③ 日本宗教史の名著を読む ④ 鎌倉仏教史の名著を読む

※①～④まで各講座それぞれ6回の講義

◎ダウンロード版：価格一万二千元(消費税込)

全6回講義の動画ファイルとレジュームPDF

◎DVD版：価格一万二千五百円(消費税・送料込)

全6回講義のDVD6枚組とレジューム印刷物

◆ 詳細はブログ(<https://hoke-commons.jp>)参照。

■ 【本化ネットワーク叢書】 頒価一冊二千元+送料

○ 叢書(2) 『九識説』とは何か』

○ 叢書(3) 『本門戒壇論の展開』

## 法華コモンズ通信 第十四号

○ 発行日 二〇二五(令和七)年二月一六日

○ 編集発行 法華コモンズ仏教学林

○ 発行所 法華コモンズ仏教学林 事務局

一九二〇〇五一 東京都八王子市元本郷町一・一九

【FAX】 042(627)7227